

毒を喰らわば皿まで

木曜日生まれの子供達

※ リン

若い頃のアンドリムに良く似た青年。
アンドリムの庶子ではないかと
疑われている。

※ ユピテル

秘匿されてきた王子。
ダンテとアルベールに出会い、
心身ともに成長していく。

※ ヨルガ

バルセミス王国の元・騎士団長。
アンドリムの番として常に共にある。
最後となるキコエドへの旅路も、
当然、彼の一番近くに。

※ ダンテ

リサルサロスの王太子。
右眼に魅了の魔眼を持つ。
アルベールを溺愛している。

※ アルベール

シングルズの嫡男。
竜の加護を持つ聡明な少年。
生後半年からダンテの婚約者。

※ アンドリム

バルセミス王国の元・悪の宰相。
日本人男性だった前世の記憶があり、
自ら運命を切り拓いた世界で、晩年を迎えようとしている。

Characters

プロローグ

生まれた日を祝う文化というのは、至極一般的なものだろう。

幼き日は成長を喜び、青年期は進歩を尊び、年老いては歩みを讃える。

この日に生を受けた君に幸あれと、手を叩き、言祝ぎを唱えて微笑む。

誕生日は、人生の分かりやすい節目だ。

呪いを受け、人間として正しく年齢を重ねる術を失くした俺であっても、その特別な節目は当然ながら存在する。

それが只人と異なる点は、ただひとつ。

俺にとってその節目は如実に、寿命の残りを刻むものであるということ。

アンドリム・ユクト・アスバルであった【俺】が前世の記憶を取り戻してから、十二年の歳月が過ぎた。

悪の宰相である俺と悪役令嬢ジュリエッタ、そして神官長マラキアが破滅する世界ゲームのシナリオは俺の手で書き換えられ、それぞれが新たな役割を担になうようになった。

俺は『最後の賢者』として大陸全土に名を馳はせ、ジュリエッタは『銀月に愛された女神』と国民達に慕われ、マラキアは『慈悲深き神の使徒』と竜神信仰で崇あがめられている。

しかし世界を模かたどっていた『竜と生贄いけにえの巫女』の舞台が終わっても、名目的に国政からは身を引いた立場である俺のもとには、次々と厄介事が舞い込んだ。

誘蛾灯ゆうがとうに惹き寄せられるようなそれは、俺という異分子が残されてしまった世界に働く、浄化作用のひとつであったのかもしれない。

それを越えていくたびに【俺】の存在は少しずつ世界に馴染なじみ、明朗であった前世の記憶も、今となつては知識以外の全てが朧おぼろげになった。

妹と両親の顔すら、思い出せなくなつて久しい。

欠片かけらも哀かなしく感じないと言えば嘘になるが、以前の記憶全てを持ったままというのは、確かに重荷となるだろう。

何せ今世で俺が得た縁えんはひどく生々しく複雑で、それでいて、何より愛いとおしいものだから。

王城から届いた手紙に目を通していた俺は、木製の扉が軋きしむ音に顔を上げ、窓際に置かれたソファから立ち上がった。俺が辿り着くよりも先にリビングに繋がる扉が開き、薪を抱えた美丈夫が姿を見せる。

「お帰りヨルガ。薪を割つてきてくれたのか」

「ああ、しかし残りが心許こころもとなくなつてきたな。数日は保もつと思うが、そろそろ買い出しに出るか」
 労ねぎいを込めて頬に唇を押し当てた俺に軽く口付けを返し、暖炉横のウッドホルダーに慣れた手つきで薪を重ねる男の名は、ヨルガ・フォン・オスヴァイン。今年で五十の歳を迎える、俺の夫だ。

勇者の血統を引き、凡そ人外なのだと言われたほうが頷ける強さを誇っていた男も、共に過ごす歳月と共に緩やかに老いを重ねた。

ヨルガは数年前に騎士団長の座を長男シグルドに引き継ぎ、同時にオスヴァイン邸も相続させた上で、大樹の森にあった狩猟小屋をログハウスに改築して俺と暮らしている。首都からそれなりに距離のある大樹の森は静かで過ごしやすく、日用品の調達も森を抜けた小さな町に行けば事こと足りるので都合が良い。

引退騎士と引退文官の無害な道楽なのだから、穏やかに過ごせるだろうと俺達は考えていたのだが、そうは問屋が卸おろさなかった。

本来は早々に舞台を去る定めであった俺の名は、現在に至つても影響力が大きい。

余談ではあるが、数年前にはアンドリムかそれにあやかる命名が流行っていると教えられ、俺は眉間を押さえて深い溜息をついてしまった。

元とは言えども悪の宰相と呼ばれていた男の名であるし、そもそも男子に生まれたのなら、パルセミス王国の盾と誉れ高き騎士団長ヨルガの名に因んだ名前のほうが良いのではないかと思う。しかし統計を担当していた事務官曰く『ヨルガ様は将来の姿として思い描くには、些か現実味に欠ける銜（てら）がございまして』とのこと。

成るほど、と納得しかない。

目標は高く持つべきであっても、天の高みに臨むのは愚かな妄想だ。手の届く範囲を見据えるのが賢い選択と言ったところか。

一応、俺は人間の範疇（はんちゆう）に見做（みな）されていると分かって、奇妙な安心感さえ覚える。

そんな俺とヨルガが揃って大樹の森に移り住み引退を明言した時から、俺には国王陛下と現役宰相からの相談だけでなく、諸国家からは引き拔きの打診、王侯貴族からは専属顧問の依頼がこれまでに以上（いじょう）に寄せられるようになった。

ヨルガのほうには何処（どこ）かの騎士団で、指導者を務めてほしいと請われる代物が多い。

勧誘（かんきゆう）の類には一貫して断りを入れているが、本国からの相談だけは仕方なく引き受けるようにしている。

なぜなら無視を決め込んでいると、俺が孫に弱いと知っている宰相閣下が、ディートリッヒの背中に可愛い孫を乗せて刺客に送り込んでくるからだ。

「あのね、お爺さま。モリノ様が『困ってるんです』ってこんなお顔してたの」と自分の指で眉尻を下げ、キュウと情けない表情を浮かべて見せたアルベルから上目遣いに「お手伝いしてあげて？」と頼まれると、断る術はない。

それでも実際に登城する回数は減っているの、遣りとりは主に伝令を用いて行われる。

そんな形で王城からの相談を受け続けた弊害で、カルタの子供である若鷹リストは、俺に手紙を託されるとなんの指示がなくともモリノのもとに運ぶようになってしまった。正しく対象を指定すると他の人物も探し出せるので支障はないが、変な癖をつけて申し訳ないと思う。

「それが、今回はどうも、薪の残りを心配している場合ではないようだ」

「……何があった？」

リストが運んできた手紙をひらりと翻（ひる）して見せると、ヨルガは形の良い眉を顰（ひそ）め、俺の手から便箋を抜き取る。モリノの筆跡で綴られた文面を読み進める榛色（はしばいろ）の瞳が、驚きに大きく見開かれた。

「実に面白い話だと思わないか？ ヨルガよ」

腕を組み、顎（あご）を親指の腹で軽く擦りながら、俺は笑う。

「——キコエドで、俺の隠し子が見つかったそうだ」

第一章 隠し子

俺とヨルガが居を構える大樹の森からパルセミス王城までは、馬車を使って半日ほどの距離がある。乗馬の腕に自信があれば抜け道を通ることで移動時間を格段に短縮できるが、その行程には間隔が狭いとは言っても峽谷の上を飛び越える箇所があり、馬に乗れるだけの俺としてはごめん被りたい。

そこまで急ぐ必要はないのだから舗装された道を往こうと告げた俺の提案はあっさりと却下された上に、有無を言わず馬の背に押し上げられた。諦めた俺が体勢を整えている間にヨルガはさつさと鎧に足をかけて同じ馬に跨り、大きな腕で俺の腰を引き寄せる。密着した背中から伝わる生地の感触は柔らかい布地のもので、丈夫な軍服や装飾が施されたサッシュを身につけなくなった彼の変化を俺に伝えてきた。

俺が肩越しに振り返り手綱を握るヨルガと軽い口付けを交わしてから馬を走らせはじめるのは、二人で暮らすようになってから自然と生まれた習慣で、そんな積み重ねのひとつひとつを愛おしく思えるようになったのは、俺自身も少しは変わったからだろうか。

ヨルガの引退と同時に軍馬としての役目を終えた愛馬フルグルは、残念ながら数年前に疝痛を患ってその生涯を終えている。

現在、俺達の移動手段となってくれているのは、フルグルの孫にあたる青鹿毛の 아우로라だ。祖父譲りの屈強な体格と強靱な馬力を兼ね備えた駿馬は、軍馬になれば騎士の良き相棒となってくれたことだろう。

しかし 아우로라 は馬には珍しい双胎妊娠で、母馬が先に産んだ仔馬だけを我が子と認識してしまった結果、生まれてすぐに育児を放棄されている。

아우로라 は母馬に蹴り潰される寸前に、出産に立ち会っていたヨルガに救い出された。馬房の職員達と協力してなんとか確保した母馬の初乳を哺乳瓶を使って 아우로라 に飲ませたのは、他でもない俺である。

そんな事情もあって、ヨルガと俺にすっかり懐いた仔馬は騎士団で飼育している軍馬のコミュニティに溶け込むことが難しくなり、一市民が保有するにはやたらとスペックが高い、俺達の持ち馬となった。まあ、二人乗りが多い俺達には悪くない話ではあるが。

아우로라 の背に乗ったまま南門を通って首都に入ると、機能的に区画された美しい街並みと活気に溢れる人々の表情が目に入る。俺が計画を残した上下水道の完全整備や街灯の設置は、順調に進んでいるようだ。

宰相モリノと協力して新たに創立したパルセミス王立学園は、古代竜カリスが地底湖から飛び立つ際に挟れた岩盤台地を利用してコロシラムに似た校舎を有している。奨学金制度を充実させることで国内外から優秀な生徒が集まり人気だそうだ。

王城の門を潜る前に、上空から大きな影が俺達を追い越した。見上げた先にあるのは予想通りに、

両翼を広げた砂竜の姿だ。

城壁を護る衛兵達にとつては既に見慣れた日常の光景らしく、挨拶代わりの竜の咆哮にも、手を振って鷹揚に応えている。

「これは、待ち伏せに合うとみて間違いないな」

「情報漏洩が著しいぞ」

苦笑しつつも先に進んだ俺とヨルガが城内に入ったところで、手を繋いだ幼い子供達が中庭のほうから駆け寄ってきた。俺達の孫を連れてきた砂竜は城の中庭に降り立ったようなので、そこで城内に住む幼子と合流したのだろう。

「お爺さま！」

「ヨル！ アンディ！」

飛びついてきた孫のアルベールを俺が抱き止め、同じように飛びついてきた金髪碧眼の幼子のほうは、ヨルガが軽々と抱き上げる。

「ベルジュ。少し会わないうちに、また大きくなったな」

「ふふふ！」

俺がアルベールの頬に口付けると、ヨルガの片腕に座っていた幼子が「ヴィルにも！」と頬を膨らませてヨルガの胸をペチペチと叩く。僅かに片眉を上げたヨルガが態とまろい顔に口付けてやる。「ちがうのお！」と手足をばたつかせて抗議する姿が面白い。

俺はアルベールを腕に捕らえたまま、少し背伸びをして唇を尖らせている幼子の頬にも口付けて

やった。

途端にふにやりと表情を緩め、満足そうに笑う少年の名はヴィンセント・ファリ・パルセミス。

パルセミス王国の幼い王太子だ。

二歳半年上のアルベールと、ほぼ同じ頃に生まれたものの成長が速いディートリツヒを含むオスヴァイン兄弟から弟扱いで可愛がられた少年は、自己肯定感の強い王子に育ちつつある。程良い傲慢さと狡猾さに加えて、閃きに近い思考回転が既に窺えるこの王太子を、俺は結構気に入っているのだ。

二人と手を繋いで謁見室に向かう途中では、城内の通路に収まらない体躯に育ったディートリツヒが頭だけを回廊の中に突っ込んできて、喉を鳴らして自分のことも撫でると催促した。

事情を知らない来賓などが目にしたら悲鳴を上げる光景だろうが、城内を巡回している騎士や文官達は気にもすることなく、甘えん坊の竜を撫でまわす俺達を微笑ましく見守るのが恒例となっている。

寄り道に時間を割きつつ辿り着いた謁見室では、玉座に腰掛ける国王ウィクルムと側妃ベネロペ、そして宰相モリノが俺達を待っていた。

公式な来賓と謁見する際には必ず国王の護衛に就く決まりがある騎士団長シグルドは、謁見対象が俺とヨルガであるために、騎士団の行軍指導を優先させたらしい……息子よ、職務怠慢ではないか？

国王陛下と形ばかりの挨拶を交わした後、早速本題に入るようだ。

流石^{さすが}にここからは子供達に聞かせて良い話ではないため、城付きのメイド達を呼んで外に連れ出してもらった。

王城の中庭にはデイトリツヒ専用の桃の木が何本も植えられているので、そこで一緒にお菓子を楽しむらしい。

今回の要件に自身が関わっていないければ、俺もそちらに参加したいところなのだが。

気を取り直してモリノが渡してくれた資料を捲^{めく}ると、そこには見覚えのある校舎の外観と、今回の件に関連していると思^{おも}ひ生徒達の個人情報^{おぼ}が纏^{まと}められていた。

「事の発端は、キコエドの学園都市で毎年開催されている開発論文コンテストになります」

キコエドはユジンナ大陸の中でも東南端に位置する連合国家だ。七つの州から構成されていて、州の代表の中から宗主を選んで合議を行い、国の方針を定めている。

古代竜カリスの恩寵^{おんよう}がなければ凍土となるバルセミスとは異なり、年間を通して気候が安定した、穏やかで過ごしやすい国としても有名だ。

首都シェリは貿易の中心であると同時に学園都市としての面も併^{あわ}せ持ち、俺達が王立学園を創立する際にも、各部署で参考にさせてもらった。

「学生の開発論文コンテストか。良い催^{もてい}しだな」

「実は僕も寄稿したことがあるんです。王城の登用試験を受ける前にですが」

「フツ、宰相閣下の神童ぶりには頭が下がる」

コンテストのシステムそのものはモリノが参加した頃とほぼ変わりがなく、大陸全土から寄せら

れた学生執筆の開発論文を教授達が精査し、コンテストの本戦に出場する七人を選ぶというもの。そして今年本戦に選出された生徒の中に、キコエドの高等学園に通う者が一人いたのだ。

「彼の書いた論文は資源の再利用に関するもので、かなり高い水準に纏^{まと}められています。更に彼は在学中にも拘^かわらず、既に製造技術の特許をいくつか得ているとか。将来有望ですね」

「ふむ」

「それだけならば単なる優秀な生徒の話題なのですが……彼の外見が、問題でした」

モリノはひとつ呼吸をつき、俺と視線を合わせる。

「コンテストの審査員を務めるゲスト達には、アンドリム様と面識のある国内外の学者達も多く召喚されていました。そこで、彼に——リン・ラ・シャハルに会った彼らは、一様にアンドリム様のことを思い浮かべたそうなのです」

生徒の名は、リン・ラ・シャハル。

白銀の髪と翡翠^{ひすい}の瞳を持つ、十七歳の青年。

「——あまりにも、アンドリム様によく似ている……との指摘でした」

「……成るほどな」

受け取った手紙で俺によく似た生徒がいるとは聞いていたが、噂の出所は学園に集^{つど}った学者達というわけか。

民衆の噂だけならばまだしも、学者達からも同様の所感があったとなれば、流石^{さすが}に放置はできない。「一応お伺いいたしますが、お心当たりは？」

恐る恐るといったモリノの問いかけに、俺は軽く肩を竦めて首を横に振る。

「全くもって」

「ですよ……」

年齢から逆算すれば、十八年前付近になるか。

その時期であれば、俺は既に自分の後継者を王太子と婚約していたジュリエッタがいずれ産むであろうアスバルの子と定めていた。悪業ムスロのように酒池肉林を好む性質ではないので軽率に子種を蒔いた記憶もないし、ひたすら宰相としての地盤固めに勤しんでいた頃合いだ。

そもその大前提として、アスバルの血統には『隠し子』を名乗るメリットに乏しい。

「アスバルの血を濃く引くと明言するのは、自分が呪われていると知らしめるものだ」

アスバルは、パルセミス王国においては公爵家のひとつでもある。落胤だと証明できるものがあるれば、貴族として成り上がることだけは保証されるだろう。

しかしその家名は同時に、血筋に引き継がれる古代竜の呪いを突きつけてくる。

俺とジュリエッタが持つ白銀の髪と翡翠の瞳は、千年の時を経ても緩まぬ呪いを受けた証左だ。いくら容姿に優れていようと、短命であるという事実は大きなデメリットになる。

現役を退いた立場であつても、業績を残してきた先代が有する発言力や後ろ盾は貴族社会の中かなり強力なものだ。

ところがアスバルの子を名乗るならば、それを殆ど望めない。一線を退いて間もなく、先代は命を落とす。つまり、庇護者の後押しなく自らの才覚だけでのし上がる覚悟と実力が必要となる。

アスバルの隠し子を名乗るくらいならば、まだ他の貴族の家名を挙げたほうがまだだろう。

建国以降、不老と短命の呪いと共に宰相の輩出が多いことで有名なアスバル家には、呪いの宿命から逃れた分家筋もいくつか存在している。

アスバルの『呪い』そのものは決して揺るがずとも、その『血筋』を過分に引くかどうかは、生まれてくる子供によってそれぞれ異なるからだ。

俺やジュリエッタのように白銀の髪と翡翠の瞳を持つている場合はほぼ確実にカリスの呪いを継いでいるが、それ以外の容姿で生まれてきた子供は、呪いを受けているかどうかを外見では判断できない。黒髪で生まれてきたシグルドを俺が自分の息子だと公表できていたのは、その辺りに理由がある。

パルセミス王国において『アスバル』の家名を許されるのは直系の一族のみなので、分家に下った場合は別の家名を冠するのが通例だ。今はヨルガの息子として正式にオスヴァイン家に迎え入れられたシグルドも、本来ならば王家から新たな家名を授けられるか、何処かの貴族の家に養子に出される予定だった。

そして俺の一人娘であるジュリエッタがオスヴァイン家に嫁いだ後に呪いを解き、唯一の『アスバル』となった俺は、新たな子孫を得ないまま晩年を迎えている。

となれば、それが齎す結果は明らかだ。

「アスバルは終わらせる……それはもう、覆らない。そう、決めている」

終わるのではなく、終わらせる。

俺が言い切った言葉に、国王ウイクルムのみならず、側妃ベネロペと宰相モリノも一様に言葉を詰まらせる。

立ち位置の都合上目視できなかった男の表情もどうやら同様の代物らしく、背後から伸びた腕が黙したまま俺の腰を引き寄せ、玉座の前にも憚らず抱き込む強さで腹の上に回された。俺は苦笑しつつその腕に自分の手を重ね、宥めるように軽く摩る。

五十四の歳が過ぎた俺に残されている時間は、もう多くない。巡る季節に咲く花を、俺が再び目にすることはできないのだ。

元老院まで巻き込んで議論を重ねたアスバルの行末は、俺が終ぞ誰の説得にも折れなかったので、ヒノエの宿で望月に見守られつつヨルガに語った終焉と変わりない。

アンドリム・ユクト・アスバルを最後に『アスバル』の呪われた血統に終止符を打つ。

それが、この世界を異物で崩した俺が自らに課した、最後の役割。

「今更、延ばそうなどと考えてもらっては、困るのだよ」

どうして『アスバル』を生き存えさせようとしているのか。しかもそれがパルセミス王国ではなく、ユジンナ大陸の中でも対極の位置にある遠いキコエドにおいて。

それは既に破綻した神のシナリオが垣間見せる悪あがきか。それとも、誰かの産んだ悪意か。

或いは――

「……何はともあれ、身に覚えはなくとも、現地に行ってみなければなるまい。伝え聞くままの外見ならば、実際に会ったら俺の実子かどうかを判ずるのは容易いからな」

ふう、と軽く肩を竦める俺に、申し訳なような表情を浮かべつつも、モリノはしっかりと頷き返す。

「パルセミス王立学園も五周年を迎えて課題が見えていますので、視察を兼ねてキコエドの学園都市を訪問しても違和感は持たれないと思います。件の青年ともスムーズに遭遇できるよう、僕のほうで手を打っておきますね」

「ああ、頼む」

詳細は決まり次第すぐにお伝えしますと言ってくれたモリノの言葉に甘え、俺とヨルガは早々に堅苦しい謁見室を辞し、再び並んで中庭に面した回廊を進む。その間にも、モリノから手渡された資料に次々と目を通していく俺に注がれるヨルガの視線は、焦燥というより何かしら諦念にも似た感慨が含まれたものだ。

眼鏡のグラス越しに「何か言いたいことがあるか」と俺が睨め付けると、愛しい男の目尻に刻まれた皺が緩く撓む。

「……お前は本当にいつになっても、何かしら厄介事に巻き込まれる」

「フフッ、人気者ですまないな？」

確かに、共に過ごした十数年の間に俺達が巻き込まれた事件の数々は、大小含めれば両手両足の指を使っても数え足りない。

その殆どが俺に起因する代物であり、ヨルガは俺に付き合う形で巻き込まれることが多かった。しかしこれで俺が黙って一人で対処しようなどと試みて危機に遭遇しようものならば、烈火の如き怒りを買うのも想像に難くない。

何せヨルガは俺自身よりもずっと、俺を鑑みて生きている。

伴侶とは斯くあるべきだと、教本にでも載せたら良いのではないかとも思う。まあ少しばかり、度がすぎてもいるが。

「いや、それでいい。お前と共に刻んだ時間が多いのは、喜ばしいことだ」

「……貴様。男前なのもいい加減にしろよ？」

理不尽な言い分をヨルガにぶつけつつ回廊を進んでいると、午後の日差しが降り注ぐ中庭の一角で、贅沢にも竜の翼を日除けにした子供達が芝生の上ではしゃぐ声が聞こえてきた。

「あ、お爺さま！」

「ヨル！ アンディ！ 父上とのお話は終わったのか！」

目敏く俺とヨルガの姿を見つけたアルベールが元気に声を上げ、それに反応した王太子ヴィンセントも振り返り、兎のように跳ねながら手を振ってくる。

どうやらアフタヌーン・ティーパーティーは継続中のようなだ。

折角だからお邪魔させてもらうかと俺達が揃って中庭に足を踏み入れると、二人の上に翼を翳していたディートリッヒも機嫌良く喉を鳴らした。

『グルルルウ……』

竜にとつては挨拶になるという軽く長めの唸り声を漏らすディートリッヒの足元には、行きがけには見かけなかった小さな身体がぺとりと寄り添っている。

「……じいじ」

「ああ、ミヒヤ。お前も来ていたんだね」

「……ん」

「そうか。ならばジュリエッタとローズも一緒かな？」

「……ん」

兄達と比べれば些か無口な幼子を抱き上げると、ぱちぱちと瞬いたサックスブルーの瞳がじっと俺を見つめ、綻ぶように笑う。

俺はストロベリーブロンドの巻き毛に覆われた頭を優しく撫でて、小さな額に軽く口付ける。

すぐにアルベールが両腕を伸ばし、まだ二歳を数えて少しの大事な弟を俺から受け取り、自分も負けじと頭の頂点に口付けた。

いつの間にやら、立派なお兄ちゃんができるようになったものだ。俺とヨルガは顔を見合わせ、微笑み合う。

便乗した王太子ヴィンセントにも頬に親愛のキスを贈られてくすぐったそうにしている幼児は、オスヴァイン家の次男ミカエルだ。

シグルドともジュリエッタとも違う髪と瞳の色を持って生まれたミカエルだが、ジュリエッタの不貞が疑われるようなことはない。

「美しい青色……ユリカノの瞳の色だな」

「そうか。お前の髪色と髪質は、アンジェリカに似たのか」

赤子を囲んで懐かしむ俺とヨルガが口にしたのは、シグルドとジュリエッタの、それぞれの母の

名前。

シグルドも生まれたての次男が持つて生まれた巻き毛を撫でて、母上、と僅かに涙ぐんだものだ。生まれて程なく生母を亡くしたシグルドを育ててくれたのは、俺の二番目の妻でジュリエッタの生母であるアンジェリカだった。シグルドの出生に纏わる噂に心を痛めた彼女もジュリエッタが幼い頃に亡くなってしまったが、前妻の子であるシグルドを虐げるようなことはなく、子供を顧みなかった俺に代わって正しく子供達を愛してくれていた。

二人の祖母に似た特徴を携えて生まれた赤子に、天使にあやかつて御使の名を捧げたのは他でもない俺ではあった。

名は体を表すともいうのか、熾天使の名を授かった幼児は既に、武神の血統を継いだ片鱗を見せはじめているというのだから恐ろしい。

確かにミカエルの動きを見てみると、アルベールやヴィンセントの幼少期と比べて走り方がしっかりしているし、視線に何処か鋭さを感じることも多い。視野が広く、周囲の情報を把握する能力に優れている証拠だとヨルガやシグルドは誉めているが、残念ながら俺にはあまり分からない感覚だ。

オスヴァイン家の長子であるアルベールはリサルサロスの王家に興入れが決まった身であり、長女のローザリアも程なくパルセミスの王太子ヴィンセントとの婚約が整う手筈となっている。実質、よほどのことがない限りミカエルがオスヴァイン家の後継者になるのは間違いないのだから、武勇を寿ぐ一族としては文句のない素質だろう。少しばかり口下手な点はこれから変わるかもしれない

し、変わらずともシグルドのように寡黙で誠実だと勝手に良い解釈をされることが多いから問題にはならないか。

「さて……ジュリエッタとローズが戻ったら、少しばかり提案をしなければならぬな」

弟を抱き上げたままのアルベールに視線を向け、俺は小首を傾げる可愛い二人の孫に笑いかける。

ミカエルがオスヴァインの素質を継いでいる一方、アルベールの素質が傾いているのは、確実に俺のほうだ。

おそらくこれが、俺にとって最後の旅。

ならば可能な限り、残すことを目指したい。

いずれ外国に嫁ぐ可愛い孫に。

言葉と知識と権力で、抗い戦い抜く術の全てを。

第二章 呼ばれている

パルセミスからキコエドに向かう旅程は、なかなかの長旅だ。

キコエドは大陸の反対側に位置する連合国家で、到達するには、文字通りに大陸を縦断する必要がある。

確かに十歳に満たない小児を気軽に同行させるものではないが、休戦協定が結ばれている隣国のセムトアは雨季でなければ通行に問題はなく、その先にあるリサルサロス王国はパルセミスとは友好国だ。更に言えば王太子ダントの婚約者であるアルベールが同行しているとすれば、武勇に名高いムタニ族で構成されたノイシュラ王の近衛兵達このえいたちが勇んで道中の護衛に来るだろう。

しかしその先でリサルサロスから南下してキコエドに向かうとなると、五年に及んだ内乱が漸く収まりつつあるオアケネス大公国が、近年になって良質な鉱床が国内に多数点在することが判明し緊張状態を強いられているダルデニア王国のどちらかを通過しなければならない。どちらも現状の治安が良いとは言えず、可能であれば避けたい道程だ。

そうなると陸路で向かうのではなく、リサルサロスを東西に横断している道をヒノエまで駆け抜け、ヒノエの都アズマから船でキコエドに向かう道が一番安全だと結論が出る。キコエドの首都シューシエリは貿易都市でもあるので、アズマからの交易船が頻繁に通っている。

ユジンナ大陸と異なる遠い異国の文化と情緒で構成されたヒノエを知るのは、リサルサロスに嫁ぐアルベールにとっては有益だ。

それに俺はヒノエの国主であるシラユキには、大恩ある賢き御方、などと過剰な評価を受けている。俺が存命のうちに彼とアルベールを引き合わせ、印象を上げておくのも良策と言える。

数日の短い距離ではあるが、船旅の体験も楽しいだろう。

更に来年からパルセミス王立学園に通うことになるアルベールに、歴史の深いキコエドの学園を先んじて体感してもらうのも悪くない。

王城に召喚された後。

俺とヨルガは二人で暮らす大樹の森には帰らず、首都にあるオスヴァイン邸に立ち寄ることになった。

オスヴァイン家の当主であるシゲルドとその妻ジュリエッタ、そして三人の孫達と共にテーブルを囲みお抱えシェフのディナーに舌鼓したづみを打ちつつ、今回の旅にアルベールを同伴させたい旨を伝える。

俺の突拍子もない言動に慣れている二人でも流石にこの申し出には驚いた表情を見せたが、最終的には本人の希望に委ねると言ってくれた。

俺はテーブルを挟んだ正面に座るアルベールに微笑みかけ、少し緊張した面持ちの幼い彼にも理解しやすいように言葉を砕き、ひとつひとつ、旅に帯同させる理由を伝えていく。

「……それに何よりな、ベルジュ。私は可能な限り、お前に見せておきたい」

これはまだ勘にすぎないが、今回の旅路も、恐らくは安穩としたものにはならない。

モリノからの手紙を受け取つてすぐに情報を集めさせたキコエドの現状から推察すると、単なる『隠し子騒動』が孕む渾みは既に何かしらの闇深さを垣間見せている。いくらヨルガが傍にいても、それなりに危険度は高い。

それでも俺がアルベールを旅に同行させたいと願うのは、これが最後の機会だと分かっているからだ。

俺という存在は、この世界でイレギュラーに値する。

ゆえに世界は事あるごとに俺の存在を拒もうと試み、そのたびに俺はそれを捻じ伏せ、高らかに嘲笑つてきた。

十二年もの間、俺はそうやって、戦い抜いたのだ。

しかしその攻防も、遂に完結する。この世界に存在を刻みつけた上で、アンドリム・ユクト・アスバルが終わる。

悪役として断頭台の露と消えるのではなく、『最後の賢者』などと大層な誉を得た上での、鮮やかな終焉。

感覚的には、勝ち逃げに近い。

俺の生き様を、見倣えとは言わない。

ただ、仄暗き沼から這い出る有象無象と対峙する未来が待っている愛しい孫が、運命の輓に引き

摺られるのではなく、思う儘にそれを操る存在となれるように。

道標となる甲斐性程度は、俺に託されてもいいのではないか。

「一緒に行こう、ベルジュ」

俺が差し出した手のひらにアルベールは榛色の瞳を瞬かせ、それでもしつかりと、頷き返してくれた。

和やかなディナーが終わり、三人の孫達がそれぞれの部屋に戻った後。

食後酒を嗜みながらひと息ついたヨルガが、それで、と改めて俺に水を向けてくる。

「わざわざ現地に足を運ぶ理由はなんだ？ 賢者殿」

「なんだ、流石に気づいているのか」

行儀悪くテーブルに肘をついたまま俺がブランデーのグラスを揺らすと、シグルドとジュリエッタも顔を見合せて笑う。どうやら、子供達にもお見通しだったらしい。

「父上の悪業を教える程度であれば、国内でも隣国でも事足りるでしょう」

「……生意気な口を利くようになったものだな？」

「いつそ国内の旅行でありましたなら、私もローズを連れてご一緒いたしますのに」

「フフッ。流石にあの子の教育は私ではなく、宰相閣下に委ねるべきだ」

王太子ヴィンセントと一歳違いの長女ローザリアは黒髪に翡翠の瞳を持つ少女で、幼いながらもジュリエッタの親友である賢妃ベネロペに憧れを抱いている。彼女もどちらかというと俺やアル

べール寄りの思考回路を持つタイプに育ちそうだが、それこそ俺と同じ戦い方を身につける必要はない。

幸いにして今のパルセミス王国に才女を疎んじる風潮はなく、順当に育てばやがてローザリアは王太子妃となり、その先に王妃となる未来が待ち受けている。才覚を磨く機会は、いくらでも自ら作り出せるはずだ。

「まあ『隠し子』騒動がブラフであることは分かっているさ。おそらくは本人も、承知の上だ」

アスバルを名乗ること。それは直に無意味となる。他でもない俺が終焉を紡ぐのだから、間違いない。

例えばアスバルの外見と等しい特徴を持っていたとしても。白銀の髪と翡翠の瞳は、アスバル一族の専売特許という代物ではない。なんの関係もなく、偶然にもその色合いで生まれてくる子供もいる。そんな子供に、滅びが待つ一族の名を掲げさせてどんな益があるだろう。

「……遺された家名が大きいだけでは無意味だし、どちらかと言えばデバフになる。俺の名に添えられた『価値』を尊ぶのであれば、求められる才覚も同様だ。そんな期待に応え得る実力を持っているのであれば——最初からアスバルを名乗る愚行など、冒さない」

単に貴族としての高い地位を求めても、終焉を迎えるアスバルでは話にならない。

アンドリムの名に捧げられた誉の威を借りようとするならば、並び立たずとも遠からじといった程度の実力が必須となる。

「件の少年は頭が良いと聞いている。アスバルを名乗る『無価値』も、俺の隠し子を演じる『無意

味』も、理解しているはずだ。論文の発表をする際には国内外から多くの学者達が訪れるのだから、俺に似た外見を見られたら騒がれるのも予想できただろう。目立ちたくなければ白銀の髪を一時的に染めても良かったし、翡翠の瞳を色付きグラスの眼鏡で隠しても良かった。だが、そうしなかった。なんの弁明も発言もなく——ただ騒ぎが広まるのを、放置した」

つまりこれは、彼自身が望んだ噂の広まり。

自らの外見的特徴を餌にして、隠し子の噂が遠くパルセミスで暮らす俺のもとに届くのを期待したものの。

そこから導かれる結論は、ひとつ。

「誰かの遊びでも、企みでもない。これは、悲鳴だ」

預ける手紙の内容も誰かへの言付けも徹底的に監視されるような、そんな厳格な管理下の環境にあつて。

俺という稀な異分子を呼び寄せるために仕掛けた、たったひとつの布石。

気づかれるかどうかさえ賭けだったのだろう、一筋の光明を求めた叛逆。その切なる悲鳴を、幸いにして、俺は聞き逃さなかった。

「——呼ばれているのだよ」

助けてください。

どうか、どうか助けてください、と。

旅に出るには、それなりの準備が必要になる。荷物の支度だけではなく、自身の体調を整えることも肝要だ。

それに俺には、明確なタイムリミットが設けられている。まだ十ヶ月以上あるとはいえども、日程調整は徹底しておきたいところだ。

この十年ほどの間で俺とモリノはパルセミス国内の街道整備を徹底し、移動にかかる時間を大幅に短縮させることに成功している。一定の距離に駅を設けているので、急ぎの旅路では馬を交代させて、移動時間を更に縮めることも可能だ。

これは将来的には、乗合馬車などでも応用できるシステムに昇華させていくのを理想としている。頻繁にパルセミスを視察に訪れるリサルサロスでも、街道と駅舎の敷設は順調だ。害獣ヤツを警戒し夜間に単独で馬車を走らせることは禁止しているが、その分、街道を警邏する組織を新たに設け、東西に長く伸びた領土を横断する街道の安全性を高めている。

パルセミスからセムトアを抜けてリサルサロスに入るまでに要する時間は、雨季でなければ馬車を休まず走らせ続けて一日半ほど。今回はアルベールを連れているので、無理をせずに二日間の日程を組んでいる。

リサルサロスに入国後は、横断するだけであればヒノエまで一週間ほどで事足りる道程ではある

が、流石にリサルサロスの領土を踏んでおいて首都ネビメンに立ち寄らないわけにはいかないだろう。王太子の婚約者が同行しているのだから尚更だ。

既にネビメンの王城にはリストに頼んで報せを飛ばして程なく受け取った返事によると、国境まで俺達を迎えに行くメンバーを決めようとしたところで希望者が殺到し、部隊の編成で争っているとのこと。下手をしたら王太子ダンテまでもが国境に向かいかねないらしく、黒豹將軍と親子喧嘩に発展しているそう。事情はともあれ、平和そうでは何より。

方々への根回しなどにも気を配り、諸々の準備が整った頃には、俺とヨルガがパルセミスの王城に召喚されてから一週間が経過していた。

出立を三日後と定めた日に、俺達は再度、王城に呼び出される。

「……殿下の姿がないな」

王城に到着して謁見室に向かう回廊を進みながら、ぐるりと周囲を見回したヨルガが呟く。

いつもは到着と同時に護衛の騎士とメイドを連れた王太子がアルベールを迎えにきて、仲良く手を繋いで遊びに行ってしまうのだが、今日は俺達の来訪が告げられても幼い彼の姿が見えない。

「王太子教育に新たなカリキュラムでも追加されたか？」

「一昨日お会いした時には、そんな話はされていませんでしたが……」

俺の疑問に、勉強の意味も兼ねて王太子のスケジュール管理を補佐しているアルベールが首を振る。

珍しいこともあるものだ」と呟きつつ、結局アルベールを連れのまま謁見室に入ったところで、その理由が知れた。

「アンドリム、ヨルガ。そしてアルベール。よく来た」

国王ウィクトルムの座る玉座の隣に一回り小さな、しかし造りの良い椅子が置かれている。そこに、やや足が地面に届かない状態でありながらもちゃんと背筋を伸ばし行儀良く前を見据える王太子ヴィンセントの姿があった。玉座を挟んで反対側には側妃ベネロペが、少し離れた位置に宰相モリノがいつものように控えている。

片膝をつき謁見の口上を述べた俺達を早々に立ち上がらせたウィクトルムは、この一週間で集めたという資料を俺に渡してくれた。

予想通りにきな臭い状況が窺える分厚い紙の束を捲る俺の手元を、上背のあるヨルガと彼に抱き上げられたアルベールが覗き込む。

「……成るほど。予想以上に、穏やかではないな」

「下手をしたら、これは大陸全土に飛び火する案件だぞ」

資料を読み込み唸る俺とヨルガに、宰相モリノが眉を顰めて息を吐き、静かに同意を示す。

「ええ。まさかキコエドがこんな大規模の爆弾を抱えているとは、僕も想像もしていませんでした。警鐘を鳴らしてくれたリン青年に、感謝をしなくては」

「それは俺達の役目だな。隠し子の真相を確かめに現地向かう……貴族が取る行動として実に分かりやすく、文句のつけ難い来訪理由だ。学者達の証言もあるのだから、リンとの面談を拒まれる

こともないだろう。あとは彼にどれほど自由があるか、が問題だ」

しかし彼の『伝え方』から察するに、その自由は限りなく狭いものと見て間違いはない。

「資料にもありますが、リン・ラ・シャハル少年は孤児です。キコエドを構成する七つの州のひとつ、チェリカの首長オトマ・グ・シャハル氏の養子となったのは五年前。彼が十二歳になった頃です」

「随分と成長してから養子に迎えた形だな」

「はい。オトマ氏には、既に後継者と定めた長男がいます。今は療養中ですが、特別に優秀ではないが素行に問題もない青年……という無難な報告でした。ですから、新たな跡取りを求めたわけではなく、単純に彼の賢さを見込んで身内に引き込んだ……という形でしょうね」

おそらくは、後継者である長男の補佐をさせるために引き取った、賢い孤児。

リン青年とて最初は養子にまで迎えてくれたことに感謝して、首長補佐が立派に務まるように研鑽を重ねたことだろう。

そして、知ってしまったのだ。

「……賢さとは、な。時に、仇にもなる」

賢いがゆえに、彼は気づいてしまった。

キコエドが孕む、深い闇に。

着々と育つ、破滅の産声に。

そして『気づいた』という事実を、隠しきれなかったのだ。

「リンがどんな柵を抱えているかは、まだ分からない。しかしいざとなれば、多少は強硬な手段

で保護せねばなるまいよ」

「……まさか、未成年を拉致する気か？」

「フツ、人聞きが悪い。しかし、それも想定に入れてある。先方の出方次第だが、その場合は頼むぞ、ヨルガ」

「そうですね。彼自身を『証拠』として確保する意味合いもありますので、僕も同意見です」

俺の行動を疑いなく是とするモリノの言葉にヨルガは呆れているが、既に何度も繰り返された遣りとりだ。流石に会話に追いつけなかったのか、ヨルガに抱えられた腕の上でキョトンとしているアルベールの表情が愛らしい。

「確認は終わったか？ さて、ここからが本題だ。アンドリム・ユクト・アスバル」

「はい、陛下」

直々に名を呼ばれ、手にしていた資料の束をヨルガに預けた俺は、改めて国王ウィクルムに頭を下げる。

「今回の件、当初の想定よりも悪意の規模が煩雑、かつ根深いと判明している。……アンドリム、その名は『最後の賢者』として今や大陸全土に知られているが、残念ながら、形式上では爵位すら捨てた一貴族にすぎない」

「その通りにございます」

実質、それはそうなるように俺が最初に仕向けたからでもあるのだが。

「身分に囚われない立ち位置は、ひとつの強みでもある。ましてや最後の賢者が相手ともなれば、

損得を別にして働く者もいるだろう。だが今回の相手は、そもその質が違う。キコエドは、我等のような誇りや名誉を重んじる風潮に乏しい国家だ。ヨルガが騎士団に籍を置いている間であれば、まだ話は別だったが……今のお前達は一線を退いた騎士と引退文官、そして成人前の小児にすぎない。それでいてキコエドの中樞を喰い荒らすのは、非常に危うい」

「一理ありますな」

謂わばお国柄、とでも言うのだろうか。

連合国家のキコエドは各州での自治性が高い分、首長と宗主の意見が食い違い、軋轢が大きくなりやすい。だからその分、肩書が何かと物を言うわけだ。

俺が頷くの待ち、ウィクルムは、今度はヨルガを呼び寄せた。

アルベールを腕から下ろし玉座の前で静かに片膝をつくヨルガの前で、玉座を立つたウィクルムは腰に帯びていた剣を抜き払う。麗しい宝飾の施された剣の刃が、頭を垂れるヨルガの肩にひたりと当てられる。

「ヨルガ・フォン・オスヴァインよ。長らく王国騎士団団長を務めた貴殿が、今も鍛錬を欠かさぬ姿に敬意を覚える。王国の盾、竜制す者、そして我が師匠。ウィクルム・アトレイ・パルセミスの名において、貴殿をパルセミスの【近衛騎士】に命ずる」

「……謹んで拝命いたします」

既に引退した騎士であるヨルガに与えられた、近衛騎士の称号。王家の直属騎士に授けられるものだ。

王族だけでなく、王国にとって重要な客人を護衛する職務も受け持つ部隊の総称。国王陛下もまた随分と思いついたことを考える。

次いで勢い良く小さな椅子から立ち上がったのは、母ベネロペの合図を待っていた王太子ヴィンセントだ。

「ベルジュ……アルベール・シア・オスヴァイン！」

「はい、殿下」

弟にも等しいヴィンセントに呼ばれたアルベールも、先に称号を与えられたヨルガに倣い、幼い王太子の前に片膝をつく。

「いつも共にいてくれて、嬉しい。ヴィルは……わたしは、ベルジュが大好きだ！ ヴィンセント・フアリ・パルセミスの名において、きでんをわたしの【従者】に命ずる！」

「はいめい、いたします」

単なる従者ではなく、王太子直属の従者。

これもまた、貴族の子供達が羨望する称号だ。

王太子直属の従者ともなれば、彼が見聞きすることは全て王太子に届くものと見做されるし、逆に従者が口にした言葉を、正式に王太子の発言とすることさえ許される。余程の信頼がなければ、得られない称号だ。

確かに、アルベールの身を守る術のひとつとなるだろう。よく考えてくれている。

彼らの成長に感慨深く思考を巡らせていた俺がふと顔を上げた先に、弧を描いた唇で微笑むモリ

ノの顔があつた。

……いや待て。

嫌な予感がするぞ。

「アンドリム・ユクト・アスバル殿」

笑みを浮かべたまま俺に近づいた宰相モリノは、臆する俺の手を緩く掴み、手のひらを上に向けさせる。

チャリ、と鈍い金属音と共に手のひらの中心に置かれた重みは、かつて俺が携えていた時のそのまま。

背面にパルセミス王家の紋章が彫られた懐中時計は、持ち主の変遷など意にも介さず、金色に輝き宰相の証を示す。

「今日からこれは、あなたのもの……おめでとうございます。宰相アンドリム・ユクト・アスバル」

十 十 十

「不本意だ」

緑に囲まれた静かな庭園の一角で、ティーカップを上品に口に運ぼうとしていたマラキアが、ふと小さく声を漏らす。急いでカップをソーサーの上に戻したものの、カタカタと震えるその縁からは、今にも紅茶が溢れそうだ。

俺がじとりと横目で見つめると、麗しの神官長は遂に堪えきれなくなったのか、法衣の袖で口を隠しクスクスと笑いはじめる。

「……そんなにおかしいか」

「いえ……フツ、深謀遠慮で名高い最後の賢者殿でも、遂に若者にやり込められるようになったのだと」

「相手が悪かった。身分重視の強いお国柄だと情報は入っていたので何かしら手を打ってくれるだろうと予想はしていたが、せいぜい爵位を与えてくる程度のもと思っていたのだよ」

それがまさか、十二年ものブランクを経て、宰相に戻されるとは思わなかったのか。

俺はテーブルの天板に肘をつき、黄金色に輝く懷中時計を手の中であぐさると弄ぶ。

かつて身につけていたものではあるが、俺は自ら手放したものにそこまで執着を持つ性質ではない。

しかし確かに、モリノの判断は間違っていない。

宰相の肩書を背負っている限りキコエド側は俺を簡単には害せないし、国王から直々に近衛騎士を護衛に就けさせる理由も生まれる。

しかし同時に、この肩書にはある種の煩わしさがつきまとうのは明白だ。代表的なものとしては、貴族主催のパーティやサロンへの招待状が山のように届く辺り。

俺が宰相職に返り咲いたという通達が国内に流布されたのは、一昨日の午後だ。そして今朝までにオスヴァイン邸に届いた招待状の数は、既に二桁の後半に達した。俺が虚ろな目になってしまっ

たのも、仕方がないだろう。

「どちらにしても俺は、明後日には他国の土を踏んでいる。パーティなんぞに参加している暇はない」

「その貴重な時間を、僕との逢瀬に割いてくださるとは……嬉しいですよ。貴族の方々が悔しがる表情が目に見えます」

旅立ち前に祝福を受ける体裁で神殿を訪れた俺を、本来の仕事もそこに笑顔でティータイムに誘ってきたのが神官長なのだから笑える話だ。

しかしマラキアは働きすぎの銜が強いので、俺が来訪すると自ら休憩を取ってくれとリュトラや女官達からは感謝された。

「俺は、お前と過ごす時間は大事にしているほうだよ」

「お気持ちは嬉しいですが、近衛騎士殿の耳には届かないようにしてくださいね？ 僕なんぞ小指ひとつで捻り潰されてしまいます」

大袈裟に身体を震わせる仕草には、悪態のひとつもついてやりたくなるといふもの。

「愛する神殿騎士団長殿はどうした。父親を超えるぐらいにはなっているだろう」

「純粹な強さであれば、今はシグルド様に次いでいるとは思いますが」

「けど……？」

「リュトラは優しいですからね……この歳になっても僕を手放さないでいてくれる辺り、人格的に甘いのは間違いないですよ」

自分を卑下する癖が抜けないマラキアの言葉に、俺は薄く息を吐く。

人魚に纏わる事件で凶刃からリュトラを庇ったマラキアは、俺が口移しで与えた人魚の秘薬で一命を取り留めたが、その代償に記憶の欠片を失った。

記憶は、心を模るもののひとつ。

なんに関わるものであったか見当はついてきたが——それを満たす役割を俺は果たせない。

「マラキア、その見識は改めたほうがいい。オスヴァインの男を『甘い』と見做すのは間違いだ。いつの日かそれは、お前の楔となるぞ」

「覚えておきます」

マラキアは殊勝に頭を下げているが、事の本質に辿り着いていないのは分かっている。しかし、先に舞台から去る俺にできることは、後顧の憂なきを祈るのみ。

「……忘れるな、マラキアよ」

いずれ訪れるその何時かに、俺はお前の傍にいない。

十 十 十

神殿からオスヴァイン邸に戻ると、ヨルガとアルベールの正装が王城から届いていた。

元々近衛騎士の軍服が王国騎士団のものと似ていることもあり、新しくヨルガに仕立てられた服も騎士団長時代とほぼ変わらない出来栄えだ。

王太子の従者となったアルベールの正装は、ナポレオンジャケットを基調に騎士の軍服に準じた

仕立てになっていた。

王太子から授けられた腰帯にパルセミス王家の家紋が刻まれたブローチを留め母親譲りの美貌で佇む姿は、祖父の晶肩目抜きにしても凛として美しい。しかしそれが笑顔になると榛色の瞳に宿る光が柔らかく緩み、一転して人懐っこい雰囲気を出すのだ。

そんなものだから十歳にも満たないアルベールには既に親衛隊なるものまで存在するらしい。非公認ながらも相当の会員数を誇るといって害もないので今のところ放置しているようだが、俺としては多少気掛かりな集団である。

孫の晴れ姿を存分に誉めそやした後で、俺は壁際に立ち、少し窮屈そうに軍服の襟を指で弄っているヨルガにひたりと寄り添う。

「……お前のそんな姿を見るのは、久方ぶりだな」

ヨルガが騎士団長を引退したのが三年前だから、軍服姿を目にするのはそれ以来、ということになる。

毎夜俺を組み敷く雄々しい肉体を、生真面目な衣装で隠した禁欲的な姿だ。正直、とても唆る。物言いたげに見上げる俺の眼差しに、自覚のある本人は口角を上げて機嫌良く笑う。

「惚れ直してくれたか？」

「フフッ。たとえ襟襟を身に纏っていたとしても、お前ならば、滲み出る品格を隠せはしまいよ」

「……新たな宰相閣下は、何とお優しいのか。この近衛騎士めが昼夜を分かつお傍に控え、高邁なる御身をお護りすると誓おう」

言葉遊びで戯れ合っているうちに、補整箇所を素早くチェックした執事長レゼフの手で、ヨルガの新しい軍服は速やかに回収されてしまった。明日の昼には出立で補整を急ぐのだから仕方がないだろう。

薄いシャツ一枚の姿になったヨルガと、同じく貰いたての正装を剥がれたブラウス姿のアルベルとの二人が揃ってキョトンとした表情になったのは、何やら面白い。

すぐに着替えを持ってきたメイド達に二人の服を整えてもらい、勤めを終えて帰ってくるシグルドを待つ。

夕刻近くになってオスヴァイン邸に帰ってきたシグルドは、家族揃っての出迎えに喜んだ。

彼が汗を流してくるとテーブルを囲んでディナータイムが始まった。

今宵の豪華な晚餐は、初めての長旅に挑むアルベールの激励も兼ねている。次々とサーヴされる料理の数々がどれもアルベールの好物で揃えられているのは、シェフ達の心尽くしと言ったところか。

「そういえば、団員達から父上宛に招待状を何通か預かりました」

「……パルセミス王国の誇る騎士達は、余程暇とみえる」

「父上が赴く必要があるとは思えなかったので、私のほうで全て断りを入れましたが……あまり責めないでやってください。実家や本家からの要望には、逆らえない団員達も多い」

「分かっているとも。一応は私に招待を出したという事実が必要なのだろう」

貴族同士の利権や思惑の絡み合いは、何処でもあること。こればかりは、多少改革が進もうとも

変わることはない。

「それと父上。その……明日の出立前に、俺に『宰相』としてご命令をいただけませんか」

「……何か困りごとでも？」

宰相の権限が必要な何かがあるのだろうか。

必要ならば出立を数日遅らせるかと告げる俺に首を振り、シグルドは視線を逸らして少し照れ臭そうに指で頬を掻く。

「俺が騎士団長となるより前に、父上は宰相位を辞されていたでしょう？ その、一度は『宰相』である父上に、騎士団長として命令をいただいていたいなと」

……思ったよりも、俺の息子は物好きだな？

十 十 十

楽しいディナータイムを過ごした俺とヨルガは湯浴みを終えると、早々に宛てがわれた客室に引き籠った。

客室と言ってもここはかつてヨルガの自室だった場所で、オスヴァイン家の当主となったシグルドの配慮で特別なゲスト——つまりは俺とヨルガがオスヴァイン邸に滞在する時専用の客室にしてくれている。

屋敷の主人は既に代わってしまったが、俺達が睦み合った時間が一番長いのは、確実にこの部屋

に置かれたキングサイズのベッドの上だ。

ナイトロープを羽織ったヨルガは仰向けに転がったベッドの上でゆったりと書籍の頁を捲り、俺は彼と向き合うように、逞しい胸板に押し掛かる形で身体を乗せている。

呼吸と一緒に僅かに上下する身体の傾きは、この男と共にあるのだと教えてくれる要素のひとつだ。

悪戯にちよいちよいと布地の上から乳首を搔いてやると、下から見上げる顎先が僅かに震えた。可愛い俺の番は、意外にも敏感なのだ。

調子に乗った俺は、少し立ち上がったヨルガの乳首に、ナイトロープの上から吸い付く。そこまで大きな突起ではないので、吸い付くほどに唇の隙間から唾液に空気が混ざり、じゅぶじゅぶと濡れた音が大きくなった。

乳首を吸いながら密着した腹の隙間に手を差し入れてロープの帯を解き、腹筋から下腹部、髪と同じ色をした下生えまでを手のひらで丹念に辿る。髪よりも幾分硬めのそれを指の間で櫛削り、いつも俺の胎を満たしてくれる肉杭を丁寧撫で、ずしりと重い睾丸も淫みを作った両手に納めて柔く揉みしだく。

身体の下にある腹筋が震え、喉から響く低い笑い声と共に、ヨルガの身体が少しだけ伸び上がる。手にしていた書籍が閉じられる音と同時に聞こえた軽い金属音は、彼が書籍を読むためにかけていた老眼鏡を畳んだ音だ。

もうひとつの乳首に挑みながら見上げると、彼の身体を熱心に探索している俺を榛色の瞳が見

つめ、甘く緩む。

お返しとばかりに上に跨る俺の身体に這わされた肉厚の手のひらは、うなじの焼印から翼の痕跡、背骨のひとつひとつから尾の名残骨までを順番になぞる。

尻の肉を両手で掴まれて無遠慮にも左右に割り開かれ、普段は晒されることのないアヌスにひやりとした空気を感じた俺は腰を揺らして喘いだ。

すぐに侵入してきた太い指は速やかかつ強引にも肉杭を迎え入れさせる準備を施すべく、胎を拓こうと蠢く。

しかしそこが既に熱く解れ肉襷が指全体に絡みつくほど熟していると理解すると、ヨルガは歓喜に突き動かされた表情を浮かべる。

「今日も準備をしてきていたのか……？ アンリ」

「ん、ふっ……」

挿し入れた二本の指が中で開かれ、腸壁の襷がじわりと引き伸ばされる感触。

態と指の抜き差しを大きく繰り返して自分で仕込んだローションを掻き混ぜられ、粘着質な音が天に向けて響く。

アヌスから溢れたそれは俺の会陰から睾丸の裏を濡らし、跨いだ腹の上で衰えぬ剛を誇るヨルガのペニスにまで滴り落ちた。

早くそれで貰いてくれと急ぐ胎の中が、暴き足りないとなおも探る指に吸い付いて、貪欲なお強請りを訴える。

「ヨルガ、あ、ヨルウ……ん。も、早く……」

俺は自分で立たせたヨルガの乳首に頬を擦り付け、もう我慢が利かないと鼻を鳴らした。

「俺のアンリ……お前から、欲しがってくれ」

熱っぽく耳朶に吹き込まれる言葉になんとか返せたのは、甘い吐息のみ。

俺はヨルガの腹に両手をついて半身を起こし、腰を前後に揺らして、尻たぶの隙間でその剛直を強く擦る。

ちゅくちゅくと淫猥な音が繰り返されるたびに、組み敷いた男のペニスが育っていく様子が愛おしい。自らを貫く槍を自らの手で育てる行為に抱くのは、ある種の倒錯にも似た背徳感。

いつの日かこの仔に喰われるのだろうと覚悟しながらも、拾ってしまった狼の仔を慈しみ大事に育てた羊の御伽話(おとぎばなし)が脳裏に浮かぶ。献身的な羊は結局、育てた狼の腹に収まることなく、物語の最後では別離の道が選ばれた。

しかしそれは本当に羊にとって幸せだったのかどうか。

狼の群れで長となった養い子と別れ独りぼっちの寢床で羊が「食べてくれても良かったのに」と呟く言葉の意味合いを、幼い頃は理解できなかったが、今は嘸みしめることができる——愛する人に喰われてしまうほうが、幸福に決まっているのだ。

俺は片手で前のめりになりそうな身体を支え、もう片方の手で丸々と育ったヨルガのペニスを後ろ手に掴む。呼吸を整えながらなんとか槍の穂先とアヌスが口付けを交わす段階まで持っていくと、そこは物欲しげに肉の唇を開閉させて、ご馳走を啜え込もうと辛抱なしの涎を垂らす。

「んっ……ふ、ヨル、ガ」

「ほら、もう少し」

「はふっ、こ、こう……？ ん、もう、入る……」

「……上手だ、アンリ。ほら、手伝ってやる、から！」

「ひうっ……！」

ヨルガの手が俺の尻たぶを割り開き、槍の一番大きな部分が雄膺の中に侵入を果たした。重力の助けるままに腰を下ろして身悶えると、脈打つ熱杭が凶暴さを増し、腰を掴む勢いで胎の深みまで打ち込まれる。

全身を侵食する抗い難い悦楽の波は、背骨を通じて脳を焼き、雄に与えられる感覚しか考えられなくなっていく。

「あ、ああ！ 深い、そんな、最初、から！」

「アンリ……ハハッ、蕩きたい顔、だ……！」

「や、そんな、なっ……じつくり、見る、なっ……！」

暴れ馬に乗せられた哀れな道化の如く揺さぶられ崩れそうに傾いた身体は、繋いだ指と逞しい腕に支えられる。

はくはくと喘ぎつつも胎を扶ける律動にあわせて自らも腰を振る。ヨルガも強い快感を得たのか柳眉を寄せ、下腹が引きしまったことで遂精を耐えたことを報せる。

なんて、ひどい。それは、俺のものなのに。

じとりと熱の籠った眼差しで睨め付けると息を乱した雄は獷猛に笑い、胎を掻き乱すペニスの先端でとうに侵略を果たした深みの角を執拗に舐る。

「は、やく」

「アンリ……！」

「そいで、俺の、胎……」

「つく……！」

「ヨル、ガ……！」

俺が愛しい番の名を叫んだ瞬間に、逞しい腰を跨いだ膝が浮くほど下から突き上げられた。同時にヨルガの臀筋に力が込められ、腸壁を焼くほどに熱い進りが窄まりの奥に勢い良く注ぎ込まれる。

「う、ううーっ……！」

俺は目を閉じ、侵略を待ち望んでいた器官に精が注がれる錯覚を存分に堪能した。

下腹部に垂れる俺のペニスは先端から薄い体液を滲ませていても達するには至っておらず、雌としての快感のみで高みに押し上げられた事実を改めて噛みしめる。

同じ雄のペニスに屈し雌として扱われても、男としての矜持は番相手であればこそ意味を変え、暴力的な墮落を受け入れられるのだ。

「アンリ……」

熱に烟る、榛色の瞳。

「は、あ……フフッ」

この男で、あればこそ。

自ら選んだ相手で、あればこそ。

満腹になった胎の奥を皮膚の上から撫で摩り。俺はうつとりと、唯一の番に笑いかけた。

十 十 十

国王が座する玉座の傍らに控えていた俺が、一步前に歩み出る。謁見室に並ぶ臣下達が連なるように頭を垂れていく様を見下ろし、腰に手を当てて薄く息を吐く。

俺が自ら宰相位を辞する十二年前まで当たり前のように繰り返されていたその光景は、面子こそ入れ替わっていても、自らが国家の中核にいるという実感を齎してくれる代物だ。

前王に代わり玉座に悠然と腰掛けるのは、国王ウイクルム・アトレイ・パルセミス。

正妃ナーシャを巡る騒動で一度地に落ちた彼の評判は、側妃ベネロペと彼を支持する若き精鋭達の活躍で少しずつ上向きになりつつある。

もしジュリエッタとウイクルムの婚約が破棄されず俺が宰相のままパルセミスの裏に君臨し続けていれば、眼下に並ぶ面子は相当に違ったことだろう。

その最たる象徴でもある騎士団長が俺達の前に傳き、片手を胸に当てて自らの仕える国王と宰相

たる俺に敬意を示す。ゆるりと見上げてくる榛色の瞳に宿るのは、抑えきれない歓喜と期待の気配。愛しい息子にこんな眼差しを送られては、流石の俺も半端な命は下せない。

「騎士団長シグルドよ」

「はっ」

「ここ数年の間に、サナハとの国境で傭兵崩れの野盗集団が増加傾向にあると報告が挙がっているな？」

宰相職を得てから二日あまり。状況が長く改善されていない案件を拾って詳細に目を通し、すぐにでも解決できるだろうと推測できたものは数件ほど。

そのうちのひとつが、神出鬼没と噂される野盗集団の存在だ。

その集団は国境近辺の村を襲って主に食糧を奪い、自警団や辺境騎士団が駆け付ける頃には煙のように姿を消す。サナハに逃げ込んでいるのではないかと考えられたが、サナハの自治軍が把握する限りでは、不埒者の集団は確認できていないとのこと。最終的には王国騎士団から討伐隊が派遣されるに至っているが、やはり成果が芳しくない。

俺はシグルドが頷くのを待ち、予め用意していた地図を文官達に広げさせた。被害の報告があった場所を指し示すと、これまでに『野盗集団』が出没したのは国境沿いの村に集中しているのがよく分かる。

「何度か討伐隊が出ているが、根絶に至っていない。その理由は分かるか」

「理由……でございますか。まずはその野盗達を捕縛できないでいるのが、原因であるかと」

成るほど、模範解答だな。

「良いか騎士団長殿。行動には理由があり、それが成るには根拠がある。神出鬼没であったとしても、パルセミス王国随一の武力を誇る王国騎士団が傭兵崩れ如きに遅れをとるはずもない」

「……しかし、実際に」

「言っただろう。重ねて言うが、お前達は傭兵崩れ如きに遅れはとらない。であれば、結論はひとつ」俺は再び地図の上に指を置き、『最初に被害に遭った』と言われる村を、爪の先で軽く示す。

「最初から、野盗集団などいないのだよ。いないものを捕らえることなど、できようはずもない」「いない……!？」

驚きに目を見張るシグルドを置いて、俺は宰相補佐として一步引いた位置に立つモリノを振り返る。

「モリノ。野盗の被害に遭った村への支援策は？」

「……同年の納税免除と、生活支援金の交付となっております……まさか」

「そのまさか、だな。国からの支援目当てで野盗の被害を偽装したのだろうよ」

「そんな……」

野盗の被害報告は最初の村を中心に国境沿いに広がっている。

病の伝播のようなその動きは、近隣の村から儲け話が伝わり、ならばこちらも……と右に倣えの精神で伝わったもの。

「最初に被害報告が挙がった村の資料に目を通したが、被害に遭った年の前年に手を出した新しい

農作物の栽培で、壊滅的な失敗をしている。商人から話を持ち込まれた村長の提案で村民達も出資して買い付けた新種の苗が、どうも土壤にあっていなかったらしい。確かに上手く育てば相当の利益が得られたのは間違いないようだが、最初の土壤調査を怠ったのが一番の敗因だ。村には借金が残された上に、税として収めるべき小麦の収穫までもがままならない。小麦を育てる労力の大半を、大きな収益が見込める新しい農作物の栽培に充てていたわけだからな」

古代竜カリスの恩寵で潤うバルセミス王国は、基本的に天候の悪化による不作とは無縁だ。

しかし虫害や土壤の相性による影響であれば話は変わってくる。

特に古代竜カリスの座する首都近辺から遠く離れた国境沿い付近であれば、恩寵の効果そのものがそれなりに目減りするというもの。

「本来は、万が一農作物が不作となっても災害時の食糧やその年の納税として補完できるよう、小麦の備蓄を各村ごとに量を定めて義務付けている。だから今年の収穫が悪くてもそこから補えば良い話だが、この村では備蓄を利用した動きがない。ここからは俺の推測だが……備蓄を利用しないのではなく、利用できなかったのではないか？」

「……どういう意味ですか？」

モリノの言葉に、俺は軽く肩を竦めて答える。

「ないのだよ。備蓄分が、既に手元になかったんだ。商人の口車に乗せられて、村の備蓄小麦を売って苗の購入資金に充てたのだろう……察するに、商人の真の目的は苗の販売よりも、村に備蓄されていた小麦を安価で手に入れることだ。恩着せがましく押し付ける新しい苗が村の土壤に適合して

いるかどうかなんて、知ったことではなかっただろう」

そして見事に騙された村長と村人達は、身銭を切ったばかりか自分達の生命線である備蓄小麦までも差し出して財産を泥に捨てる結果となったのだ。

「単なる不作であれば、まだ言い訳はできた。しかし近隣の村は納税分の小麦を育てているのだから、どうしてこの村だけ不作になったのかと追及されるのは間違いない。何よりもこの村では、国で定めている備蓄分まで手放してしまっている。厳しい沙汰が下るのは、火をみるよりも明らかだ」だから彼らは、苦しい嘘をついた。村を野盗の集団が襲い、備蓄小麦を奪ってしまった。実りが少なく見える小麦畑も、野盗が刈り取り持っていったのだと報告を挙げたのだ。

「……最初は彼らも、到底通じる言い訳ではないと思っただろう。だがなんと、それが通じてしまった」

野盗の被害に遭ったとされる村に首都から派遣された調査員は新人とベテランのペアの文官だったのだが、運の悪いことにベテランのほうが村に到着する寸前で落馬し脚の骨を折る重傷を負った。村長の家に運び込まれた調査員はすぐに医師の治療を受けて大事に至ることはなかったが、折れた骨が治癒するまで碌に歩けない。仕方なくベテランの調査員は新人に指示を出し、新人が村長と村人と共に被害を受けた村の中を見て回るようになった。

若い調査員は親切に應對してくれる村長や村人達に好感を抱き、彼らが示すままに被害状況を調査用紙に書き込んでいる。更には村長達との会話の中で、被害調査において虚偽か真実かの見極めにはどのような点を重視しているかを教えてしまっていた。調査用紙を受け取ったベテラン調査員